



VOL 7

2007 特別号

発行2007年12月30日

日本山岳会 山岳地理クラブ

URL www.jac.or.jp/doukoukai/

特集・AGCの中央分水嶺踏査



男鹿岳への稜線を望む

社団法人日本山岳会・山岳地理クラブ

***** 目次 *****

はじめに	代表 北野 忠彦	2
第1章 概要		
1-1 AGCの踏査範囲		3
1-2 担当区域とはこんなところ	平野 彰	3
1-3 AGC踏査の概要	北野 忠彦	3
第2章 踏査報告		
2-1 甲子峠～甲子山～旭岳～須立山～鏡沼口～三本槍岳～大峠		6
甲子山へのヤブルート	近藤 善則	6
雨の中、再び甲子山へ	片野すみ子	7
坊主沼調査	平野 彰	7
旭岳の猛烈な藪の中で失ったもの	羽鳥 和江	8
大峠～三本槍	北野 忠彦	8
大峠で合流、三本槍へ	近藤 善則	9
2-2 大峠～三倉山～番屋のコル～赤柴山～黒滝股山北		10
大峠から流石山へ、最初の分水嶺を踏む	近藤 善則	10
番屋川遡行のはじまり	北野 忠彦	11
番屋川ルートの調査行	平野 彰	11
予備探索山行 番屋川から番屋のコルへ	西村智磨子	12
大峠～大倉山～番屋川縦走隊	森合 孝信	13
分水嶺踏査を終えて	今井 秀正	14
AGC 大分水嶺フィナーレ	北野 忠彦	15
2-3 黒滝股山北～黒滝股山～黒滝股山南		16
今更ながらにして思うこと	井上 千夏	16
黒滝股山を越えて「大分水嶺」へ	井上 希夫	16
東の方向に向け藪の中に突っ込む(東北隊)	西村智磨子	17
近藤さんの眼鏡はどこへ飛んでいったのでしょうかね(南西隊)	鶴田 泰子	18
隔田沢偵察	北野 忠彦	18
2-4 黒滝股山南～大萱峠～上海岳～大川峠		19
大川峠への林道偵察	遠山 元信	19
分水嶺踏査に参加して	大西 攻	20
栗生沢偵察	北野 忠彦	20
上海岳の思い出	鶴田 實	21
大川峠から上海岳の先まで	遠山 元信	22
大萱峠道探索・県境尾根	半田 明絵	22
2-5 (福島区域) 布引山～鎌房山～大白森山～甲子峠		24
鎌房山手前林道	平野 彰	24
大白森山から鎌房山への密藪	近藤 善則	25
藪の鎌房山をつなぐ	今井 秀正	25
鎌房林道サポート隊	遠山 元信	26
雪の鎌房山 再訪で乾杯	高橋 素子	27
第3章 分水嶺あれこれ		
3-1 分水嶺で火が点いたアマチュア無線	遠山 元信	28
3-2 峠と峠越えの路	近藤 善則	28
3-3 湖沼の記憶	平野 彰	29
3-4 栗生沢付近の情報と聞き取り調査	遠山 元信	30
3-5 岩代国若松第一区全図について	平野 彰	32
3-6 那須基線	近藤 善則	33
第4章 資料編		
4-1 踏査の集計		35
4-2 踏査参加者		35
4-3 お世話になった方々		35
4-4 踏査区域の資料・文献		36
4-5 報告書集		36
あとがき		49

はじめに

代表 北野 忠彦

日本山岳会100周年記念事業の一環として進められてきた中央分水嶺踏査は2006年11月に全てのルートが完踏され、日本列島が一本の線で繋がった。

わが山岳地理クラブ(AGC)は、当初一般公募も視野に入れて、三平峠から鳩待峠までを第一候補として希望したが、他クラブとの兼ね合いもあり、帝釈山脈・甲子峠から大川峠までと山王峠から安が森峠までの2箇所が担当区域となった。その後、参加の同好会が増えたため、後者の区域を譲ることになった。1/2万5千分1の地形図での検討の結果、三本槍岳西の大峠から西方は、栃木側からの入山はかなり困難と思われ、主として南会津側からアプローチすることにした。

2004年5月21日の第1回山行から、2006年5月5日のフィナーレ山行まで、約3年に及ぶ踏査を行ってきたが、「日本列島中央分水嶺踏査報告書」には、会員22名(他にサポート等の非会員多数)が延べ20日にわたって踏査したことになる(同試料6)。また、同報告書添付のCD-ROMには19のAGC報告書が収められている。しかしこれらは、中央分水嶺に達してからの分水嶺上の報告書であり、当然これらのほかに、中途断念した山行や偵察山行は含まれておらず、これらを加えればその数はさらに増加する。

フィナーレ踏査を終えて早くも1年過ぎた今年の春、遅まきながら、これらの山行も含めすべてをまとめて記録に残そうという事になった。

しかしいざ纏めていこうとすると記憶もあいまいになり、いたずらに時間だけが経過し、まとめていくのが困難を極めたが、会員の努力により、このほど漸く纏める事ができた。踏査に参加した方はもとより、この踏査を陰日向になって、応援・協力していただいた方々に心からお礼を申し上げる次第です。われわれの踏査がどういうものであったか、多少なりとも知っていただければ幸いです。

第1章 踏査の概要

1-1 AGCの踏査範囲と踏査ポイント

(E321) 甲子峠 ~ (E322) 甲子山 (E323) 旭岳 ~ (E324) 須立山 - (E325) 三本槍岳 - (E326) 大峠 - (E327) 流石山 - (E328) 大倉山 - (E329) 三倉山 ~ (E330) 番屋のコレ ~ (E331) 赤柴山 ~ (E332) 黒滝股山 ~ 大萱峠 ~ (E333) 上海岳 ~ (E334) 大川峠 **全長24.7km**

注:()は踏査ポイントNo、-は登山道があるところ、~は登山道がないところ



図1 踏査範囲とアプローチ (橙色=登山道あり 赤色=登山道なし P=駐車可能地)

1 - 2 担当区域とはこんなところ

山岳地理クラブ(AGC)の踏査担当区域は、甲子峠から男鹿峠(大川峠)までの24.7kmの区間で、福島、栃木両県境であり、東北と関東の境界でもある。その後福島支部の担当区の一部、羽鳥林道から大白森山～甲子峠間(5.7km)の補充踏査を含め総距離は30.4kmになった。この区間の東は奥羽山脈の南部、那須火山帯の一角で西方は、帝釈山脈にかかる。また東北地方の南北に縦断するこの奥羽山脈に対し、東西に「節」作っているところがある。一番北側は白神山地、十和田湖南の四角山から北上山地の階上山の山々で、最南端の5番目の「節」が八海山、平が岳、尾瀬、帝釈山、那須火山から阿武隈山地へ続く高まりである。

AGCの区間はこの「節」のなかにあり、大半が玄武岩安山岩溶岩・火砕岩からなる。気候的には変化の激しいところで、雷の発生も多く、冬季間は会津側の降雪が多く、分水尾根の南側は大きな雪庇が出来る。

この区間にある山の盟主は一等三角本点のある三本槍岳(1916.9m)であろうか。藩政時代毎年端午の節句に会津、白河、黒羽の3藩がやりを立て境界を確認したとある。槍のイメージとは異なる山容にこの名がつけたいわれでもある。鎌房山(1510.2m)、大白森山(1642m)、甲子山(1549m)、旭岳(1835.2m)、須立山(1720m)と連なりそれぞれ那須火山帯の一峰をなし、甲子山は花崗岩上に堆積した安山岩や砕屑岩からなり、その東麓を源流とする阿武隈川は福島県を縦断し宮城県亘理郡から太平洋に注ぐ。旭岳は成層火山で輝石安山岩からなり、北東から流れる観音川、加藤谷川の源流で、阿賀野川から日本海に注ぐ。流石山、大倉山、三倉山と続く山域は、関東側からは裏那須と呼ばれるように静かな雰囲気

1 - 3 AGC踏査の総括

2004年5月21日、5名が音金の奥、観音沼の駐車場に仮泊する。ここは水とトイレがあり、その後もベースとなった。翌22日番屋川を目指す。チシマザサの激しい藪で遡行を断念した。今井、近藤、西村は針生に泊、23日、大峠から流石山を往復して最初の分水嶺踏査を終えた。**7月3日**、上田、片野、川村、寺田夫妻、半田夫妻、北野が三斗小屋経由大峠から三本槍手前の分水嶺分岐に達した。大峠では近藤と合流。三本槍を経て近藤は鏡沼経由で下山、残り8名は朝日岳から駐車場に戻った。**8月28日**には西村、近藤、寺田、今井、平野が大峠から大倉山、三倉山までを往復した。

同年9月12日には西村、上田、片野、川村、鶴田(泰)、近藤、遠山が平野のサポートのもと甲子峠から甲子山に登り、近藤、片野、鶴田は旭岳の分岐までを往復した。峠の看板によれば、境峠というのが本来の名称と思われた。**10月3日**には公募も含めた11名が甲子

平野 彰

山々が連なる。その西には赤柴山(1634.5m)、上海岳(1501.3m)のピークがあり、これらの稜線が大分水嶺となる。さらにこの分水嶺を越す峠は幾多の歴史も秘めている。

甲子峠は下郷町と白河を結ぶ国道289号だが、全国でも珍しい、歩いて超える国道でもある。2008年の開通を目指しトンネルの掘削中である。

笠松峠は旭岳と須立山の中間に位置するこの峠は、野際新田奥の日暮滝付近からこの稜線をつたい甲子温泉をつなぐが、今は古い標識があるのみである。

大峠は1468mの鞍部を越え、会津と下野を結ぶ重要な峠で、一時は大名の参勤交代にも使われたが、戊辰の役では、大砲も使用した激しい山岳戦の場にもなった。大峠は男鹿峠の旧道といわれ、明治初期は交流も盛んであったが、現在は土地の古老でも知る人が少なく、峠には何の痕跡も残さず完全な廃道と化した。

最南端の男鹿峠は南会津町栗生沢から水無川沿いの男鹿林道にある。現在栃木県側は荒廃が進みバリケードが設置されている。またこの南西に流れ出す大川はやがて那珂川となり、会津藩の廻米輸送のルートになり、鮎つりの名所にもなって太平洋へ向かう。文化庁文化財保護部編「中附驚者の習俗」には塩生(しおの)では昭和19年ころまで、毎年9月馬の競り市が立ち関東の馬喰も多数集まり、大変賑わったようで競り落とした若駒は那須野原などに引いて行き広い草地のある農家に預け、成馬になるまで育てたと云うことから、これらの峠をこえることも多かったのではないかと思う。このように分水嶺は物資等の輸送から文化交流の境でもあった。

北野 忠彦

温泉から甲子山に向かったが雨のため甲子山往復にとどまった。**11月12日**、6名が観音沼泊、13日番屋川に向かった。前回(5月22日)より右寄りにコースをとり、以前反射板が立っていたので反射板ピークと名付けた1624m峰を目指した。稜線下のガレ沢を詰めたが、分水嶺から20mぐらいのところではチシマザサとシャクナゲの猛藪と雪に阻まれて稜線に到達できなかった。

2005年7月10日 今井、近藤、森合、西村、鶴田(泰)が再度番屋川を詰め、ついに番屋のコル上部に到達、翌週のために水をコル付近に置いてきた。**7月17日**、観音沼を出発した近藤、今井、森合、北野が大峠経由流石山(ここの登りはニッコウキスゲがみごとだった)から大倉山、三倉山を経由番屋のコルに向かった。三倉山からの下りは道が全く無く、灌木がぎっしり詰まった藪で視界がない中、方向をGPSで確認後藪を登り返した。その先は背丈の倍以上のチシマ

ザサが密集し、歩行がきわめて困難だったがなんとか突破し、鏡沼分岐から番屋のコルまでの踏査が完了した。同日平野、鶴田夫妻と、大峠から番屋のコルを踏査してきた北野が観音沼泊、翌**18日**、鏡沼から須立山経由坊主沼小屋までの偵察を行った。それを受けて**9月17日**、近藤、羽鳥、西村の3名が鏡沼から坊主沼避難小屋に入り、翌日、小屋から旭岳分岐を経て旭岳から鏡沼に下り、甲子峠から番屋のコルまでがつながった(後述)旭岳からの下りはしばらく踏み跡があったが、その後は背丈を越すささや間僕の灌木の猛藪であった

05年11月12日、森合、寺田夫妻が3度目の番屋川アタック。ほぼ沢沿いに進み、チシマザサを分けてコルから1624mの反射板ピークに達した。しかし反射板は撤去されていた。

分水嶺西側の踏査は小出原集落から黒滝股山に突き上げる尾根から始まった。**2005年4月2日**、4名が小出原に入りルートを偵察。翌日1名を加え、スノーシューやショートスキーで1095m峰まで上がり、ルートの使用可能性の感触を得た。**5月3日**、平野、鶴田(泰)、西村、井上夫妻、北野、今井、近藤、森合が小出原に向かう。雪のすっかり消えていた急斜面をあがる。林道工事跡の錆びたワイヤーが顔を出す。1216m付近で繁みの陰に雪が残っている場所にテントを張る。明日アスナロの若木の密林に足を取られながら、最後は灌木の藪の中の黒滝股山に着いた。南会津の古地図ではアノ山とされ、下からは顕著なピークとして眺められ、地元でもアノ山と読んでいた(点名は姉山)。ここからは比較的楽な藪を過ぎ大分水嶺に立った。パーティを二つに分け、井上夫妻、西村、森合からなる今井班は分水嶺の東北方向へ、平野、近藤、鶴田(泰)からなる北野班は西南に向かった。今井班は雪にも恵まれ1339m峰を越え1330m地点で引返した。

西端、男鹿峠からのコースは、**2005年7月23, 24日**の探索から始まった。遠山、鶴田夫妻、半田(明)、西村、片野、羽鳥、大西等が栗生沢経由大川峠に入った。(大川峠は上野側の那珂川の源流、大川由来、峠から下野側は完全な廃道)ここから1501m峰に向かった。この峰は古地図大川の枝沢、上海岳の源頭にあたることから、上海岳とされ、点名も上海岳である。2日連続しての探索で、1438m峰の先に達した。**7月30日**、鶴田、西村、平野、羽鳥、寺田夫妻が大川峠に結集、栗生沢を偵察してきた半田(明)、北野も合流して上海岳に向かう。一週間ほどの間に藪がひどくなっているが、上海岳に達した。前日、山部藪人(中村)氏が歩いたばかりでまあまあ歩きやすかった。上海

岳には彼が残した上海岳の標識が新しかった。**8月18日**には西村、遠山、平野で上海岳から先を目指したが、100mを2時間ぐらいの灌木の猛藪で、上海岳の先で引返した。**8月27日**、半田(明)、遠山、非会員の前記中村、村山が栗生沢から大萱峠を目指した。古地図のオオクト沢を遊行し、1181m峰に向かう。藪を上がり、分水嶺1360m峰に達し、1445m峰との鞍部、大萱峠手前で幕営後、上海岳北の1480m地点まで足を伸ばし大萱峠から下った。厳しい、ロープが役立つようなコースだった。

余すところのAGCの担当区間は、反射板ピークから1634m峰赤柴山を越え、以前今井班が到達した1339m峰手前までの間となった。この間、**05年10月**には、3名が隔田沢左岸の1427m峰に突き上げる尾根に取り付き1069m地点まで偵察した。

大分水嶺も今回で打上にしたい。**2006年5月2日**、平野、鶴田(泰)、西村、北野で会津田島に入る。3日朝、近藤、今井、森合、羽鳥が到着。隔田沢左岸の尾根コースと、番屋川コースの2班を予定したが、隔田沢は水量が多く渡渉困難だったので、全員で番屋川を登る。取り付きからかなり雪があり藪の通過はそれほど困難ではなかった。1000m過ぎあたりからの急な雪の大斜面はさすがのチシマザサも埋まっている。コルからは所々ササが出ているが、雪に埋もれた尾根筋は歩きよく、早めに赤柴山に着きここで幕営。三角点は確認できなかった。翌4日、近藤、羽鳥は下山。6名で最後のコースに向かった。下野側に雪庇の張り出した稜線を上り下りする。1504m峰はかなり急斜面で、半田、今井、森合が先行。その先は雪が切れて小藪となって歩きにくい。平野、西村、北野の3名は1427m峰で引返した。半田等は最後の1339m峰の手前までの約700mの距離を踏破して引返した。赤柴山のデボを撤収して反射板ピークの下を今夜の幕営地とし、3年越しのAGCの大分水嶺踏査完了の最後の一夜を過ごした。

その後、霧が峰で今踏査事業の完了宣言を行ったが、若干未踏査区間が判明し、実行委員会とAGCで残り区間を踏査することになり、甲子峠から反対側踏査を受け持つことになった。**06年8月19日**遠山、今井、平野、西田は布引山から鎌房林道付近を踏査、**9月12, 13日**には近藤、板坂が甲子峠から大白森山経由で、鎌房山の鞍部まで踏査、翌日合流した、平野、今井、寺田らと共に鎌房山の東から山頂を経て鞍部を繋いだ。

07年3月17, 18日、羽鳥湖スキー場のペンションにて、AGCの中央分水嶺踏査完了を祝い、再度雪の鎌房山山頂に立った。



第3章 分水嶺あれこれ

3-1 分水嶺で火が点いたアマチュア無線

遠山元信

山岳地帯における遭難救助要請に携帯電話の利用が目立って増えてきた。しかし、この携帯電話も衛星携帯電話でない限りどこでも通話できるとは限らず、通話可能エリアは基本的には居住地域と国道沿いに限られ、山岳地帯から通話できた時は運が良かったと認識すべきである。

今回我々が分水嶺で入山した大川峠山麓の栗生沢集落と下流にある田無沢集落は、平坦で多くの人が居住しているにも関わらず携帯電話の中継所は設置されていないため通話は不可能、もちろん入山した上部の山岳地帯でも非常に難しい状況であった。そこで大川峠からの分水嶺の入山に際し、当初から携帯電話通話不能エリアと想定し緊急時の連絡手段としてアマチュア無線を選択、第一回目は三名、第二回目は二名、第三回目は一名のアマチュア無線免許保持者がおりトランシーバを持参して参加した。この頃から山岳地理クラブ内でアマチュア無線免許取得が流行だし、現在では会員の1/3の人が免許を取得、430メガの中継局を利用して160キロもの遠方の地とトランシーバ同志で交信に成功した例もあるくらいになった。

分水嶺踏査中においては幸いにして緊急使用は無かったが、2005年9月18日に旭岳を踏査中の近藤氏を、遠山が上尾からトランシーバで筑波山の中継所を利用して呼び出し、これを旭岳側では受信できたものの送信トラブルによって交信には至らなかった。これが会員に遠距離通信が可能であることを理解して貰うきっかけとなった。そして翌年の5月3日、番屋のコルから赤柴山を目指した仲間と山麓に遅れて到着した遠山が、稜線上にいた平野氏、今井氏、近藤氏、森合氏と頻りに交信、翌5月4日午前6時、遠山が自宅からトランシーバで再

度筑波山中継所経由で稜線に居る平野氏と今井氏を呼び出し、赤柴山と上尾間で交信に見事成功した。これが会員間での最初の遠距離交信となった。その後の鎌房山に参加した時も本体とサポート隊で連続で交信、徐々に山岳地理クラブでのアマチュア無線利用頻度は高くなってきた。その結果、分水嶺終了後には羽鳥女史が八ヶ岳の赤岳・横岳、筑波山から、近藤氏が長野県東御市から、今井氏が富士山、中ア・空木岳から電波を出し、それぞれ上尾と交信に成功している。

問題はアマチュア無線の免許を所持していても、普段からの交信経験がないと緊急時にはまったく役に立たないことを自覚しておく必要がある。電波を出す位置的な問題、電波を出すタイミング、電波を出してからの会話方法など、山岳地帯からの緊急時にも使用することを念頭に置いている場合、それぞれ全てにおいて熟練が無ければ不特定の局と交信をしなくてはならないので、いくら緊急事態と称しても無免許の違法局と疑われ相手にされず、逆に強い電波で潰されることも十分考えられる世界であることも知っておいていただきたい。この中で特に相手局のコールサインの把握ミス、自局のコールサインを間違えるようなことだけは絶対に避けていただきたい。それらに慣れれば、どんな山奥からでも電波は確実にどこかの局が受信し対応してくれ、緊急事態の連絡が確実なものとなる。

今後の我々は、雨天、降雪時の無線装備と運用方法、移動地からの見通し距離の問題、さらに低温下に於ける電池消費問題と送信出力調整問題、登山者間の交信方法の研究が必然的な課題となって、日本山岳会内部において無線研究実践グループとしても注目されることになるだろう。

3-2 峠と峠越えの路

近藤善則

分水界は水を分かつ境界であるが、単に自然界の境界線というだけでなく人文・社会面でも色々な形で影響を与えてきた。特に「峠」は集落どうしを繋ぐ路の頂点であり、今のような通信手段のない時代においては重要な情報交換の場であった。物資の交換場所であったり、双方の集落やその先にある社会生活の出来事を伝える重要な役割を担っていたのである。われわれの担当した区間にも幾つかの峠があり、今なお重要な交通要所になっている所や役割を終えて、その存在すら消された峠とその峠を越える古道があった。そんな峠路を振り返ってみよう。

1、甲子峠(かしとうげ・かっしとうげ)

AGC担当区間の最北側の峠である。ここは全国でも珍しい登山国道が通っている。白河の西郷村と会津の下郷

村を結ぶR289だ。白河側の最奥部・甲子温泉から甲子山への登山道が国道なのである。現在この下を貫通するトンネル工事が進められているが、難工事のようになかなか完成をみないが、地元では数年来の悲願だそうだ。下郷側は車道がしっかりして峠まで車で入ることができるので、甲子山や三本槍方面への登山基地となっている。白河側へは鎌房山の南側に林道があるが、崩壊が激しく、現在峠で通行止めになっている。時々二輪車が激しいエンジン音を響かしており、マニアにとっては絶好の荒道のような。南倉沢の地籍では境峠とされているようで、白河側の呼び名が採用されてたと推測する。

2、笠松峠(かさまつとうげ)

須立山の北側、正面に旭岳を見据える、展望のいい峠跡である。縦走路に小さなプレートがぶる下がっており、

気づかずに過ぎてしまいやすい。この峠を越える古道がどのようなものであったのか資料が見つからないが、ここが旧甲子峠ではないかと推定する方もいる。地形的にも甲子温泉からいきなり現在の尾根路になるの考えにくく、北側の沢筋よりも南側の阿武隈川源流の一里滝沢の方が入り、野際新田に抜けたのではないだろうかと思像しながら想いをめぐらしてみたい峠である。

3、大峠（おおとうげ）

歴史的に重要な峠であったことは間違いなく、峠らしい峠である。会津中街道として栄えたという記録も多く残されており、峠には幾つかの石仏や地藏菩薩が並んでいる。北側の会津・野際宿と南側の上野・三斗小屋宿を結び、東の尾根は三本槍岳、西の尾根は流石山への交点である。



4、番屋のコル（ばんやのこる）

峠としての記録はない。我々の踏査の際、このコルへ至るルートに最も悩まされた。三倉山と赤柴山の鞍部にあり、地形図には番屋川からの監視路が赤柴山東方 1624 m 地点まで載っていたので、当初容易に達することができるだろうと判断して、番屋川を遊行したのだった。ところが途中から路は途絶え、かすかな踏み跡を辿るのだ

3 - 3 湖沼の記憶

1. 観音沼（かんのぬま）

今回の分水嶺踏査における前進基地として幾度か野営の場となった、観音沼駐車は観音沼森林公園の一角にあり、観音沼はその中心にある。公園一体は野鳥の宝庫でもあり、神秘的なムードただよう沼の周辺には遊歩道が巡らされ、四季を通じて探鳥に訪れるひとも多い。また沼の中にあちこちに浮島が浮かんで、周辺の山々とともにその景観が美しい。駐車場の対岸には嶽観音堂が祀られていて、坂上田村麻呂が東征の際、参戦した人馬の供養のために建立したと伝えられている。御蔵入三十三観音の 13 番札所で本殿正面、向拝、懸魚などに見事な彫刻が見られ、本尊の聖観音立像は空海の作と伝えられている。

2. 鏡沼（かがみがぬま）

須立山南西麓に南北に大きな沼がありモリアオ

が、全く踏み跡が判らず、何回か敗退した末にようやく達することのできたところである。「番屋のコル」は我々が命名した名称で、その後の踏査には重要な場所となったのである。

5、大萱峠（おおかやとうげ）

最初存在に気付いたのは、平野氏所蔵の古地図であった。（別掲）いろいろ調べていくうちに色々な名称があることがわかり、踏査の大きなテーマとなった。次の大川峠（男鹿峠）と絡んで明確な結論は出ていないが、おそらく現在の大川峠は後から開削された場所で、当時の峠越えは、この黒滝股山と上海岳の鞍部にあたる場所ではないかと思われる。栗生沢の古老もかつて往来があった事を証言しており、遠山氏の調査（別掲）でもそうある可能性が高い。那珂川の源流は大川で男鹿岳が源頭となっていることから、オガ、オオカヤ、オオカワ が混ぜこぜになっても不思議ではない。

大萱峠とされるところの踏査に成功した半田氏によると、峠付近の痕跡を探し回ったが、見つけることが出来なかったようだ。この古道と峠は今後の我々の調査テーマとして残しておくことになった。

6、大川峠（おおかわとうげ）

栗生沢からの林道（通称：男鹿スカイライン）が峠に達しており、地形図ではその先の大川沿いにも道があることになっているが、現在は全く通る事ができない。また峠までの路もたびたび落石があり、峠まで車が入ればラッキーという状態である。ここから男鹿岳のルートも猛烈なやぶこぎ覚悟で臨まなければならない。

7、山王峠（さんのとうげ）

我々の担当区域ではないが、東京から会津に入るためにたびたびこの峠の下を通過してきた。山王トンネルは比較的早い時期に開通したを国道 号線の要所であるが、以前はこのトンネルの手前から峠越えの道がつながっていたが、現在は崩壊して、通過できない。

平野 彰

ガエルが生息するという。文字通り鏡のような穏やかな水面であるが、新編会津風土記巻の三七 松川組南倉沢の項に面白い伝説が載っている。

「村より辰巳の方三里余山奥にあり、東西五十間、南北二町二十間、水面鏡を磨くがごとし、故に名（づ）けり、正保中この村の農民大蔵というもの、獵のためこの沼の辺に至り、鹿笛を吹いて鹿を誘いしに神女忽然として水面に現はる、大蔵何さま変化ならんと腰に挿みし鉄砲を打ちしに、神女化して大蛇の形をあらはし、水底に沈むとひとしく空かき曇り風雨暴かに起これり、大蔵前後に度を失い足に任せて荊棘を踏みて岩瀬郡甲子温泉に至りこの事を語りしに、其辺にてかかる変異を覚えずとて人々奇異の思をなし恐れしと云う、これから七日の間近辺風雨が烈しくして諸作を荒らし実りも悪かりしとぞ」



3. 坊主沼

旭岳(赤崩山)の南南西の直下にあり、その傍には1955年に立てられ、現在は二代目で頑丈な造りの非難小屋がある。この坊主沼にも不気味な伝説がある。

昔々、親子の猟師がいた。ある日父親が山に入ったが帰ってこない。夜ふけてその子小太郎がこの沼に至ったとき、一人の坊主が現れて「親はこの沼に落ちた、早く引き上げないと沼の主に食われてしまう」と言うが、太郎はこの坊主こそ沼の主と見破った。山刀で切りつけたところ坊主は沼に逃げた。太郎は近くに生えていた藤づるの一端を身体に巻いて沼に飛び込んだ。翌朝他の猟師が二人を探してこの藤づるを引くと、1丈(約3m)ものイモリ死骸が上がって来た。その眉間には太郎の山刀が刺さっていた。

しかし親子の死体は見つからず、村人は父子を哀れみ 那須湯本温泉に小さな社を建てた。また毎年六月になると直径五六寸の白い球が多数浮いたという。何か両生類の卵かと思われたが昭和10年代からは見当たらない。(新版会津の峠・上)



4. 五葉の池(泉)

流石山を下り大倉山へ向かうと1792mの小ピークがあり、その先に五葉松やシャクナゲ等の灌木に囲まれた5~6坪足らずの池塘、五葉の池(泉)である。この辺りはミヤマキンポウゲの花畑で池にはサンショウウオ、モリアオガエルの生息地でもある。

3 - 4 栗生沢付近の情報と聞き取り調査

分水嶺担当区域が決まった時、該当地域の現状や歴史、地誌などの記録の存在、何かを調べるのにはどこへ行ったらよいか、また地元の方々は山を知っているのか、全てが暗中模索の状況から始まった。

【 古地図の存在から 】

担当地域周辺では那須岳辺りに入山したことがあっても、その奥となると入山経験のある方が少なく、見るからに山深く、情報収集も難攻すると思われた。ところが会員の平野章氏が所蔵していた『岩代国若松懸第一大区全図』(明治9年作成・明治6年-9年測量・昭和62年南会津山の会30周年記念60部限定復刻版)という絵図を例会時に拝見した時から、分水嶺踏査で歩むべき道が見えてきた。この絵図が無かったら、我々も他の同好会と同様に分水嶺もトレースするだけで周辺域の方々との接触も無く情報も得ずに終わっていたらう。その絵図の大きさと内容は素晴らしく、尾根も沢も絵図としてはより現実的な表現にちかく、各名称も克明に記録、峠を越えるルートに至っては現地を確認していないと描けないような曲がり具合までもが赤線で緻密に描かれ、地域研究、山名・地名の研究する方にとっては一読の価値がある絵図ではないだろうか。また後日判ったことであるが、同絵図は国立国会図書館にも所蔵されており、国会図書館に所蔵されている同地域の他の資料と比較しても同絵図以上の情報量と信憑性があるものではなく、同絵図の資料的価値は相当高いのではないかとと思われる。会津人の我が郷土という意気込みが感じられる絵図でもあった。

遠山元信

【 大萱峠越えの古道 】

問題は同絵図の中で我々が担当する大川峠北側付近に栗生沢集落から国境に向かって一本の赤い線が伸び、国境に大萱峠の文字が記録されていた。それは初めて聞く名で、そのルート途中には各沢の名称まで記録され釘付けになってしまった。そこでこの峠について何らかの記録があるものか、栃木県側は旧黒磯市教育委員会に問い合わせたところ那須塩原市(旧黒磯市)高林に住む研究者である高根沢広之氏から、福島県側は奥会津地方歴史民俗資料館の渡部陣一氏から多大な資料を頂戴した。内容は、両市町村とも共通しており、福島県南会津郡南会津町栗生沢と栃木県那須塩原市百村間に古くから間道(はざまみち)が存在し、戊辰戦争のおり水戸藩の退却路に使用され、その直後から整備して公道となり、明治3年9月若松県令(現在の県知事)が部下50名と本籠が越えた道で、明治5年頃には年に2500頭ぐらいの馬が通過するまでに発展、しかし冬季の雪崩や土砂崩れによる影響からか修繕が間に合わず復帰できなくなり明治9年頃には廃道同然と化していたことが記録されていた。このルートについて茨城大学教育学部の山下恒男教授も研究のため毎年栗生沢から入山していると聞き、茨城大学に連絡したところ同様な資料を頂戴した。他に日本山岳会会員で栃木県山岳連盟副会長であった小島守夫氏からも、昭和31年8月黒磯市山岳連盟が実施した男鹿岳登山路開拓の貴重な報告書のコピーを頂戴した。

【 栗生沢 】

福島県側の最終集落である栗生沢は標高690m、栃木県

側の最終集落である百村本田は標高 550m、大萱峠が標高 1280m であるから栗生沢側は標高差 590m、百村側は標高差 730m である。そんなに大きな差ではないが、地図上での各集落から大萱峠までの水平距離を見ると栗生沢側が約 3.5km に対して百村側は約 19km もある。これはどうすることもできない歴然とした差で、栗生沢から大萱峠まで毎日入山することが可能であっても、百村側の片道 19km の数字は往復で約 10 里になることから、百村側が福島方面に眼を向けていたとは考えにくい数字である。この差が大萱峠越えの道の整備の問題や、山に対する見方の差としても現れ、後の山名問題にまで大きく影響していることは事実だろう。それは明治 4 年大萱峠越えの道路を維持するために、栗生沢から峠を越えた栃木県側の桑沢に十一戸、舟石に一戸、牛蒡平に四戸移住させていることから判り、百村側は何をしていたのだろうかという疑問すら感じるものであったが、明治になって群馬・長野県境の碓氷峠、福島・山形県境の栗子峠でも同様な例があった。現在百村に行くと大萱峠方面が判る方とは遭遇できず、百村では忘れられた地になってきたような感じを受けた。この問題は国境を境に福島県側は民有地、それに対して栃木県側は国有地だったことも大きく影響していると思われる。昭和 30 年代に昭和天皇が三倉山と大倉山が入れ替わっていた山名問題に気が付かれた時、国土地理院が山名に対する聴取しても地元の方々が主張する山名の根拠は漠然としているだけで記録の提出を求めても古くは御林、明治以後は国有林のためか資料が無く、逆に福島県側は民有地であったため山字名もあれば、土地台帳まで存在していたと言う大きな違いがあった。そこから現在地形図に採用されている三倉山、大倉山の位置が決定し、前述の平野氏所蔵の大きな絵図も明治 9 年の記録ながら、三倉山と大倉山は現在採用されている位置に記録されていた。

【 聞き取り調査の開始 】

そこで福島県側の栗生沢集落で聞き取り調査を行った。直ぐ判明したのが、戦前、戦中生まれの人達は大萱峠の存在を殆どの方が知っていることだった。それではどんなところかになると判る人は少なく、加登屋商店(電話 62-3419)の湯田八十八さんが一番詳しく話した。話によれば大萱峠は船の防水止めのマキハダを牛馬に乗せて越えた峠だと言う。それがいつまで続いていたか、はっきりした年号は判らない。また那須にある三斗小屋温泉は白湯山参りで賑わい、もちろん福島県側からも多くの人達が参加、普段は野際を通り大峠を越えていたが、昭和 17 年頃三斗小屋からの帰り道に大峠より近道があるとして同行した年配者が若者を連れて大萱峠を目指した。ところが帰宅予定時刻になっても帰らないことから栗生沢では大騒ぎになったという。当時峠付近が判り難くなっていたのか大萱峠に向かって迎えも出たと言うが、当時を知る人は少なく詳細なところは聞けなかった。

また畑仕事をしていた老人にも質問したところ、今では峠への道は歩けないが、昭和 20 年代に線路の枕木需要で山を伐採した時に昔の道が現れ、それが峠越えの道であることを知ったとのこと。さらに集落の中心地に住んでいる湯田勝一さんと湯田良隆さんに、絵図上の大萱峠への谷の途中に記録されていた「山王」について尋ね

たところ、それは権現様と言い三月末から四月中旬頃に集落から青年団が出向いて簡単な祭りをしていたが、現在では行かなくなってしまいどうなったか判らないという。これは後の分水嶺踏査で、かろうじて存在していることが判明した。

栗生沢には栗生沢三ツ獅子というお祭りがある。毎年 6 月第 2 日曜に行なわれ、日光東照宮建立の際の地固めに招かれたと伝えられている。福島県指定重要無形民俗文化財にも指定され、内容が珍しいため全国から招待を受け遠征、さらに遠くトルコ共和国からまで招待の話があったが、何分にも休みが取れない人達ばかりなので断ったと言う。このお祭りには栗生沢出身の現・南会津町町長である湯田芳博さんも謡を担当し、地元ではなかなかの人気者で栗生沢の人達にとって自慢の祭りと言われている。また栗生沢には栗生沢三ツ獅子というお祭りがある。毎年 6 月第 2 日曜に行なわれ、日光東照宮建立の際の地固めに招かれたと伝えられている。福島県指定重要無形民俗文化財にも指定され、内容が珍しいため全国から招待を受け遠征、さらに遠くトルコ共和国からまで招待の話があったが、何分にも休みが取れない人達ばかりなので断ったと言う。このお祭りには栗生沢出身の現・南会津町町長である湯田芳博さんも謡を担当し、地元ではなかなかの人気者で栗生沢の人達にとって自慢の祭りと言われている。

また栗生沢は木地師の集落だとも言われているが、北隣の隔沢(へたざわ)の奥にも古くは木地師の集落があり、田無沢に居住している小倉真助さんと星春雄さんに話を聞いてみた。現在その地にはだれも住んでいないが、周辺域の山字名が話しの中に次々と出てきたのには驚き、その山字名を記録したくても地図上のどこになるのかとなるとまったく判らず、貴重な記録ができずそのままになってしまった。時間ができたら再度出向いて聞きたい一人である。地元の人でないと判らない峠越えの存在もあった。ちょうど残雪期だったため山を眺めながら教えてもらった。それは地図上で赤柴山南西にある標高点 1530m のピークに赤柴山中腹から斜めに上がる道で山麓からも確認することができた。このようなルートが他にもあるというが、はたしてどこなのか地元の人には現地に出向けば判るが地図上でとなるとどこなのかさっぱり判らないと言う。この赤柴山付近から大萱峠方面に掛けて、福島県側から栃木県側に山を越えることは比較的容易なため、栃木県側の山仕事でも福島県側の人達が請負、山を越えて行ったと言う。そのためか福島県側の人達が栃木県側のことも詳しく、十年早ければ相当聞き取りができたと思われる。しかし皆さん高齢なため溜息をつきながら喋ることが多く体調を心配し、また高齢のためアクセントが難解な部分もあって聞き出すのに苦労した点があったことも事実で、こちらも溜息をつきながら聞き取りとなった。さらに山名について、前述の県境の尾根上で標高点 1530m のピークから南西に歩くと標高点 1427m と南西側隣にもう一つの小さなピークがある。このツインピークを「ワタザネ」と言い、ここより標高点 1389m 側を「小ワタザネ」、逆の標高点 1504m 側を「大ワタザネ」というらしいが写真で確認すると標高点 1504m からさらに赤柴山付近までを含めた地域が「大ワタザネ」というようである。それは吊尾根状態の尾根の意味であるらしい。この「ワタザネ」に関しては国立公文書館にある天保九年の『陸奥国(会津領)』の国絵図に「水無村内 渡實」とあるが、これだと思われる。その同図内には「栗生沢村 高九拾六石余」「大萱峠 大萱峠峯通国境」と記録されている。幕府に提出された絵図の中に大萱峠が記録されているということは古くから存在し、古くから知られていた峠ではないだろうか。

【 上海岳の山名論 】

山名をもうひとつ記録しておきたい。栗生沢の湯田房

志さんと相原盛衛さんとよくよく話をした時に聞き出したのであるが、我々が登った三角点 1501.8m の上海岳を何と呼称しているか訪ねたところ、「くろたき」と言い、「しゃんはいだけ」「うえうみだけ」なんて聞いたことがないという。関東営林局でコピーしてもらった地図には上海岳南東側の谷に「上ウミ」、北東側の谷に「下ウミ」と記録され、これは上下の「カミ」と「シモ」で、「カミウミ」「シモウミ」と呼称するのが正解だろうと思われる。これについて栃木県側の大川林道の谷の出会いのガードレールに「上ウミ」「下ウミ」とペンキで書かれているという。ところが栗生沢側では「カミウミ」「シモウミ」なんて聞いたことがないと言う。そこで場所を細かく説明し地元での呼称名を尋ねたところ「カミウミ」じゃない、「カミミ」だよ」とのこと、さらに「シモウミ」は「シモミ」とのことと一件落着となった。聞き方によって「カミミ」が「カミウミ」に聞こえ、それを漢字で表現したら「上海」、それをまともに読んだ人は「シャンハイ」もしくは「ウツミ」になってしまうのだから山名、地名は困ったものである。地名学の難しいところである。地名、山名は地元呼称が最優先される筈であるから、谷の名は「カミミ」「シモミ」で、山の名は「クロタキ」が正解となる。それでは「カミミ」「シモミ」で考えると上下の「カミ」「シモ」が付いているので、これらを削除すれば漠然と「ミ」だけになってしまう。「ミ」の「カミ」と「シモ」と考えるのだろう。それでは「ミ」とは何だとなるが、「ミ」だけでなく「ウミ」「ユミ」「イミ」だった可能性も考える必要があるかもしれない。しかし、納得できる解答が見つからず、考えられるのは「屈曲」「崩落地」「水」「源流」を意味するところであった。この中でも特に栃木県側を流れる大川は、上流部から北上した水が「シモミ」出合いの先から徐々に東向きに変化する「屈曲」地点上流側に存在しているという位置的な点に注目できるが、これでは素人の山名論過ぎるだろうか。この聞き取り時のミスは、登山関係であちこちで見られる現象でもあり、同様な例としては都県境にある「棒ノ折」(ボウノオレ)が著名だろう。明治時代の五万分の一地形図に何故か「棒ノ嶺」が採用されているが、「ボウノオレ」が「ボウノレイ」に聞こえた結果なのだろうか。その文字から何も知らない人は次に、これを「ボウノミネ」と勝手に読み、そこから漢字が「棒ノ峰」「棒ノ峰山」などと変化したりしていた。このような問題について細かく確認すると、ガイドブックや登山用地図を担当する方が、聞き取り調査や現地調査をやっている方が、やっていない方であるかが簡単に判り、それらを取得する時の基準にするとよいだろう。

3 - 5 岩代国若松懸第一大区全図について

今回の分水嶺踏査でいくつかの話題を提供することになった本図は、単なる骨董的価値から山名や古峠の発見などで日の目を見ることになった。

この地図は南会津山の会の一会員が所有していたものを、同会 30 周年記念事業の一つとして復刻されたも

【 アノ山・姉山 】

地形図上の三角点 1405.7m に記載されている「黒滝股山」は本来三角点 1501.3m の山名となる筈で、三角点 1405.7m の点名は「姉山」、地元呼称は「あの山」。三角点 1501.3m には山名が記載されていないが、点名は「上海岳」、地元呼称は「クロタキ」である。この状況から混乱しないで戴きたいが、地形図上に採用されている山名と三角点の点名は記録する人が違うということである。また山名が違っていたりすると漠然と国土地理院のミスと指摘するが、地形図上の山名は国土地理院が地元市町村役場に調査依頼する地名調書の記録から採用するものであり、地元市町村役場の担当者が適当に対応し報告していれば、それが地形図上に現れ、逆に厳密に調査して対応したところの地形図はもちろん問題が無いようである。可能性としては昔の田島町がどのように対応したか、その報告書の写しでも残っていれば判明する筈である。また点名に関しては陸地測量部時代の測量官が地元の雇人等から字名、山名等を聞き出し採用している筈で、名称の誤りよりも聞き取りミスから当て字の文字の違いが目につく例が多い。このように地元呼称「あの山」が点名になると「姉山」、他に知るところでは埼玉県にある「茂萩山」(しげはぎやま)が点名は「四期萩」という例もある。さらに混乱しないで戴きたいが那須の三本槍岳は、この山名に対し、一等三角点の点名は「三倉山」。傍に同名の山があるだけに間違えそうな名称である。

【 山の文化の継承へ 】

栗生沢周辺で聞きたいことは他にもたくさんあった。何分にも関東から片道 200 キロから走って出向くのでは時間的に余裕がなく直ぐ限界を感じた。また周辺域の地名や状況を知らない聞き取りも難しく言葉の問題にも直面した。それらを解決するには、やはり地元の方でないと無理だと判り、田無沢に住む星清盛さんの娘さんに事情を説明し、何とか地元で貴重な話を発掘記録できないだろうかとの提案、さらに前述の栗生沢の世話役をしている湯田勝一さんと湯田良隆さんにも同様な提案をし、湯田芳博町長とも面会し説明してきた。栗生沢だけの問題ではないが、今の時代は山仕事の経験者がいなくなると山の文化は完全に途切れてしまい復旧することは不可能に近い。一つの図書館が廃館になるくらいのダメージだと言う。福島県側はまだ山を判る人が何人も居た。栃木県側には見当たらなかった。もう栃木県側の山の文化は途絶えたのではないだろうか。福島県側はどうするか。とにかく記録していただきたい。福島まで通って、それだけが気になった問題であった。

平野 彰

のである。復刻の際の説明書には次のように記載されている(要約)

「岩代国若松県は明治 6 年 1 月 27 日、従来 57 区あった区域割を 4 大区制に改められた頃、現地調査に入り明治 9 年まで約 4 年の歳月を要したと記録されている。若松

県全図4面のうち現存が確認されているものは『岩代国若松県第一大区全図』(南会津郡・北会津郡全域と安積郡のうち湖南地区)と『岩代国若松県第三大区全図』(耶麻郡のうち喜多方と西会津及び西蒲原郡津川地区)の2面だけで『第二大区全図』(大沼郡・河沼郡)と『第四大区全図』(耶麻郡のうち猪苗代と安達太良山・吾妻山)の

2面がいまだに所在が確認されていない。この地図は和紙に毛筆で書かれ、その大きさは全図『第一大区』が横2m30cm、縦1m90cmである。復刻版の製作にあたっては印刷技術と利用上の便を配慮して原図全体を4枚に分割し原寸通り復刻した」

3 - 6 那須基線

近藤 善則

2004年10月2日、中央分水嶺踏査で甲子温泉から三本槍岳間の踏査を行う際、一般公募による参加者を含めて、チャーターしたバスにより、甲子温泉へ向かった。当日は夕刻までに到着すればよい余裕のあるスケジュールであったため、那須基線を尋ねることになった。コースは東北自動車道の矢板ICより大田原の基線南端に向かい、約10kmのたて道を通り、基線北端に向かうというものである。この那須基線について若干参考に記したい

那須基線について

近代国家を目ざした明治新政府は、国土の近代的測量をお雇い外人の指導で始めることになった。明治8年(1875)には、イギリス人のマクウェンやヘンリー・シャポーの指導のもとに關東地方の測量(關八州大三角測量)が着手された。

この測量には、平地の2地点を結ぶ直線(基線)を設け、その長さを極めて精密に測量する必要があった。この一帯は、江戸時代から明治10年代(1880年前後)にかけて、那須野ヶ原と呼ばれる平坦な原っぱであった。そこで、この地が相模原(神奈川県)と共に基線測量の場に選ばれた。これが那須野ヶ原における基線・通称「那須基線」である。あらまは、次の通りである。

那須基線北端点 那須塩原市(旧・西那須野町)千本松

那須基線南端点 大田原市実取

測量の時期 明治11年4月9日～6月11日

2点間の距離 1万628.310589メートル
当初、観象台には木のヤグラが組んであり、明治10年代の開拓や那須疎水測量の際のかっこうな目標物となり、人々に親しまれた。

基線測量(大三角測量)は内務省地理局から陸軍参謀本部へ移管されるまでの事業で、その後全国三角測量時(現・一等三角測量網)に那須基線は採用されなかった。

内務省時代の三角点(原三角点)標石は陸軍参謀本部により殆ど抜き去られたが、幾つかが残っていて、その在所を訪ねるマニアも多い。

那須基線・南端

観象台 (大田原市実取)三等三角点「南区」の北東9.6m

平成12年1月復元工事完了。市文化財への指定準備中

発掘された「南端点」は上部の蓋と蓋を支える石積み(石室)部分が壊れ金属製の指標部分は無くなっていたが、大田原市教育委員会が復元工事を行った

たて道

那須基線の測量後、北点観象台と南点観象台を結んで開拓道路がつけられ「たて道」と呼ばれた。現在の地形図にもはっきり表示されており、今はライスラインの一部となっている。約10kmがほぼ直線に結ばれている。



那須基線・北端

史跡 観象台 (西那須野町千本松716-1)

町指定文化財 (昭和47年12月1日指定)所有者:農水省草地試験場

この塚は、草地試験場の前身である馬事研究所が開設されるにあたり観象台跡が用地内に取り入れられる際、西那須野町と千本松農場の立会いで発掘され、旧態に復元されたものである

明治初年の我が国における、近代的三角測量の貴重な遺跡である。

なお、塚の脇にある几号(きごう)水準点は50メートルほど南東にあったものを同じ場所に移動したものである。那須基線の位置に標高を与えるために設けられた水準点で、東京-塩竈間の水準測量用いられたといわれている



明治期の地図作成は、参謀本部陸地測量部と工部省測量司、後身の内務省地理寮(後の地理局)の二つの系統

で進められ、これとは別に北海道においては北海道開拓使地理課が進めていた。三者の技術指導はそれぞれ異なる国の指導を受けていた。参謀本部はフランス、内務省はイギリス、北海道においてはアメリカである。それがしたいに参謀本部陸地測量部に統一されたわけだが、その後、ドイツ式に変更される事になる。このあたりの経緯は複雑な利害関係が絡んでいたようで興味ある話題であるが、分水嶺踏査の主題から離れるので別の機会譲りたい。

この内務省の測量事業は明治7年工部省の測量司が内務省地理寮測量司として内務省に移管されてから、明治17年内務省地理局測量課が参謀本部測量課へ移管

されるまでの約10年間にわたっている。明治8年に基線場として那須西原を選定して、翌年にはその地方の小地図がつけられたという記録が残っている。日本山岳会の図書室に保存されている明治期の1/20万図(ケバ地図)と5万図にはたしかにその痕跡が確認できるので是非一度見る事をお勧めしたい。

参考:1 那須基線の発掘(箱岩英一・平出美則)測量
2005/5~7 サイエンスの広場
:2 近代測量史より見た那須野観象台(西沢道夫)
西那須町郷土史料館紀第2号